



佛  
譜  
一  
卷  
集



5  
4110  
8



門 5  
4110  
9-8



俳諧一葉集遺語之部

古字庵佛号 編  
幻窓 湖中  
坎齋 久藏 校

一 格字入て格を生まる所を校く又格字入る所を格語之けり  
一 格字入格をわきまとして自在を以て詩歌文章を味ひ心  
を向上の一法を遊み格を四海を究るるすべし  
一 言葉不易一対海あり  
一 他門の句ハ彩色のまじりて素門の句ハ墨法のみすべし格を以  
てる彩色のまじりて素門の句ハ墨法のみすべし格を以  
てる彩色のまじりて素門の句ハ墨法のみすべし格を以



一名人ハ世をもく細くおもしろければそめさふきくさくおもしろ

一書新化俗才一丁竹味すく

一古業極集はせれこそすきさる

一参門の心倫も業ふ業先初の心ゆくの言説冬の青の  
日様みの心さとゆゆお美徳未越後すく

一初月のころは白魚ももく一それすく

一初月ハ中人以下はものつくすれは俗誇平話のいふとく

俗誇を説きもく人のみゆる世へはしる

一初月ハ中人以下はものつくすれは俗誇平話のいふとく

一初月ハ中人以下はものつくすれは俗誇平話のいふとく

一初月ハ中人以下はものつくすれは俗誇平話のいふとく

右の書は祖箱口波よ

一初月ハ中人以下はものつくすれは俗誇平話のいふとく

菊のくさしのしして花をぬへんさうも興はえり神は昔葉を  
 豊かにしとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 花も雪の勢はつれづれしくつりおとれぬてはつれづれに花  
 けちす花さうりてはつれづれしく枝をかき雪はつれ  
 こはくしとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 きしはつれづれとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 晴はれとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 愛ゆれとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 づつれづれとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 菊葉にきくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 けちす花さうりてはつれづれしく枝をかき雪はつれ  
 ぬてはつれづれとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し

雪川と梅と花とつらや花の花

夕まのけしとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 秋の葉をきくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 一秋のけしとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 花のけしとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 方を落しとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 中よりのけしとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 雲上人のけしとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 花のけしとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 山甲らん葉葉おれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し  
 菊のけしとくはれしとくはくさうしは好むと梅おれ大層子し

一 此の書は、梅の香、茶の味、花の色、月夜の静けさ、雪の白さを描いた、  
 一 一巻の物語。又、里の梅、山の方、春の光景、  
 一 一巻の物語。又、里の梅、山の方、春の光景、  
 一 一巻の物語。又、里の梅、山の方、春の光景、  
 一 一巻の物語。又、里の梅、山の方、春の光景、  
 一 一巻の物語。又、里の梅、山の方、春の光景、  
 一 一巻の物語。又、里の梅、山の方、春の光景、  
 一 一巻の物語。又、里の梅、山の方、春の光景、  
 一 一巻の物語。又、里の梅、山の方、春の光景、  
 一 一巻の物語。又、里の梅、山の方、春の光景、

一 一月花 一句  
 一 出合 巻込  
 一 短冊 折序  
 一 寄書 添剛

今、寺、貞、真、草、の、古、式、を、所、り、し、る、の、由、り、の、由、り、の、由、り、の、由、り、の、由、り、  
 又、甚、月、花、の、坐、を、定、む、もの、也

一 諸礼 停止

芭蕉庵桃青判

一 諸礼停止

一 出合を返 但あり先

一 一句一直 正月花一句

右三ヶ條 齋式也

芭蕉庵桃青書之

行脚掟

一 右の如く... 再右... 杖に右より臥す

一 梅子... 梅子... 梅子... 梅子...

一 君父の難言... 思ひ... 程あり

一 魚を歎の肉を好む... 何事... 程あり

一 人の... 説... 中色... 一

一 一... 枯杖... 瘦脚... 一

一 一... 枯杖... 瘦脚... 一

一 舟に海を望んで、凡に饗宴度するに固辞し、かくも微醺  
 ありて止り、臥すおろむに、此様なる祀案の戒めを、醜を  
 用ふて、敬を以て、先へは、酒をきき、さうの初を、情を、たのし  
 一 船の、系代を、さす、く、ふり  
 一 代の、短を、身、さ、こ、こ、長を、都、さ、さ、お、れ、人、を、誰、さ、ぬ、の、地  
 一 酒、さ、さ、し、甚、し、や  
 一 伽藍のお、鏡、法、す、く、く、の、難、話、お、れ、の、信、成、く、く、の、苦、を、善、し  
 一 女性のお、友、さ、さ、さ、く、く、さ、さ、さ、の、師、さ、さ、弟、さ、さ、く、く、の、女、さ、さ、さ、く、く、  
 一 け、さ、さ、さ、の、親、友、さ、さ、さ、の、人、さ、さ、さ、の、傳、さ、さ、く、く、の、知、さ、さ、男、女、の、さ、さ、の、嗣、さ、さ、く、く、  
 一 る、さ、さ、く、く、の、信、成、さ、さ、さ、の、心、數、さ、さ、さ、の、山、道、さ、さ、く、く、の、一、さ、さ、さ、く、く、の、  
 一 さ、さ、さ、の、信、成、さ、さ、さ、の、有、さ、さ、く、く、  
 一 さ、さ、さ、の、物、さ、さ、一、草、さ、さ、く、く、の、さ、さ、さ、の、山、川、に、信、成、さ、さ、く、く、の、

信成のや

一 山川の、信、成、さ、さ、く、く、の、身、入、く、新、く、く、の、信、成、さ、さ、く、く、の、  
 一 一字の、師、息、さ、さ、く、く、の、信、成、さ、さ、く、く、の、  
 一 さ、さ、さ、の、信、成、さ、さ、さ、の、人、さ、さ、さ、の、信、成、さ、さ、く、く、の、  
 一 一、た、一、教、の、さ、さ、お、ろ、ろ、お、ろ、ろ、の、信、成、さ、さ、く、く、の、又、婿、信、成、  
 一 さ、さ、さ、の、信、成、さ、さ、さ、の、人、さ、さ、の、奴、さ、さ、さ、の、入、さ、さ、の、信、成、  
 一 人、さ、さ、文、成、く、く、  
 一 さ、さ、さ、の、信、成、さ、さ、さ、の、且、さ、さ、の、信、成、さ、さ、く、く、の、  
 一 さ、さ、さ、の、人、さ、さ、さ、の、信、成、さ、さ、さ、の、信、成、さ、さ、く、く、の、  
 一 さ、さ、さ、の、信、成、さ、さ、さ、の、信、成、さ、さ、く、く、の、  
 右の、信、成、さ、さ、の、信、成、さ、さ、の、信、成、さ、さ、く、く、の、  
 一 さ、さ、さ、の、信、成、さ、さ、の、信、成、さ、さ、く、く、の、





白き一切字のしん水くはすけり白文を尋ねり  
 尋日赤ハ切字のしん年ハ赤のほほを尋ねり他  
 何れも只服赤の言宗画きまきしん毛髪をれり  
 しん色えしん白くまきしん色えしん色えしん色えしん  
 色えしん色えしん色えしん色えしん

一 色くまきをしん色えしん

尋日尚白く熟く色にハ熟波もまきしん色えしん  
 色えしん色えしん色えしん色えしん色えしん  
 色えしん色えしん色えしん色えしん色えしん  
 尋日まきしん色えしん色えしん色えしん  
 色えしん色えしん色えしん色えしん色えしん  
 尋日まきしん色えしん色えしん色えしん

風文の人を甚勅きしん色えしん色えしん  
 風文を尋ねりしん色えしん色えしん

一 此本戸の 預りきしん色えしん 女角

旅裏撫の対しりきしん色えしん色えしん  
 色えしん色えしん色えしん色えしん色えしん  
 尋日まきしん色えしん色えしん色えしん  
 色えしん色えしん色えしん色えしん色えしん  
 尋日まきしん色えしん色えしん色えしん



少くはゆきまへ今の冠上車へ入句せしむる

おと楳のつらむ此のまじり部と 野水

積りの楳の時す本を此の河の舟を楳子すはむけ  
よも同業し入集りしは楳白の舟の舟を  
末とあうの舟はしむる舟とあうの舟と  
はむ楳の 着白の舟とあうの舟と  
とあうの舟とあうの舟とあうの舟と  
海へ付る

一 夫のまき改取を前受と楳りぬ 故人

翁本を清て曰翁の首尾をされはまの句すゆは  
句歌の首尾をすはまの句すゆは  
翁本を清て曰翁の首尾をされはまの句すゆは

翁のまき改取を前受と楳りぬ 故人

翁のまき改取を前受と楳りぬ 故人

一 振るやのまき改取を前受と楳りぬ 故人

翁のまき改取を前受と楳りぬ 故人

一 翁のまき改取を前受と楳りぬ 故人

翁のまき改取を前受と楳りぬ 故人

光園の秋の景色風姿ありとも北ゆるといふ若曰北は  
 系ひらんとて幸伊賀の途中の句を是を記するありと書  
 一 夕の句をあらんとて既方平の句とせらる

一 大寺をおもひの年 北はかゝるがれ 凡北

先の本屋に云ふこととて一 暮る古木の句に古本を以て散り雪の  
 一 信休之是極き事 一 花を強人の也とて切に古本を物  
 うを並座り古人の歌やせりての句をあらんとて書物を悟  
 人をもとめ出でたりし事人をもとめて人命のまこと及  
 極しと置わして書の意をさるる海もなりたることとて信休  
 形もさるる事とて所の句を曰わす一 信休の如くはすゆは  
 とせりて手紙に於て大寺を尋ねてする若曰わすこととて一 古本  
 の教はし一 古本をあらんとて大寺の句をあらんとす

一 古本をよく用ふるやうに花の葉 古来

若曰はるの葉とてはみりぬに古本ありて古人の書に在りて  
 中はれはとてとて物とてさるる世に在りてとて

一 月夜や折るはるをみる世に 古人

晴りの根の叶を林を渡る信丹の句を彌々信する一 月夜  
 めくればや折るはるをみる世に 古人の句を入集むる句は古  
 月夜といふはるをみる世に 月夜といふはるをみる世に  
 折るはるをみる世に 月夜といふはるをみる世に 月夜  
 主題向くとて信丹の句をあらんとて折るはるをみる世に  
 ともして折るはるをみる世に

一 きりしるる言はれしこと 雪の 詠 昔の

古本師と書し古本に信丹の句をあらんとて折るはるをみる世に

付るゝと成流り初ハ之盡さんとして日暮りかれば定家の心  
なりきしとぬれぬをことし〜く〜つ〜ぬけ〜とめでト  
伝詳ある事也

一 も〜つ〜ひ〜を〜め〜の〜ふ〜〜の〜花〜さ〜り〜 古来  
それハ猿之の二三事ハおのけし菊田白と芳入〜事〜一両  
年〜中〜の〜一〜と〜千〜年〜杜〜木〜の〜花〜と〜芳〜野〜の〜御〜一〜の〜中〜一〜を〜と〜  
を〜本〜の〜之〜中〜成〜ハ〜よ〜や〜も〜花〜の〜山〜と〜成〜ハ〜これ〜ハ〜一〜と〜と〜  
み〜ハ〜一〜に〜魂〜を〜〜し〜〜れ〜又〜ハ〜世〜角〜さ〜ら〜〜と〜さ〜し〜の〜め〜は〜ま〜さ〜  
年〜も〜と〜と〜ら〜れ〜て〜芳〜野〜の〜句〜と〜か〜ら〜〜に〜只〜と〜し〜ハ〜お〜の〜山〜古  
え〜の〜と〜と〜と〜冷〜し〜け〜つ〜と〜し〜を〜本〜を〜千〜年〜の〜舞〜の〜と〜け〜つ〜今  
ら〜け〜た〜ら〜今〜一〜両〜年〜あ〜ら〜〜と〜し〜の〜い〜し〜の〜い〜け〜ん〜予〜ハ〜後  
き〜し〜さ〜ら〜ぬ〜と〜

一 菊の香ハ秋の香より高き故に菊の香 菊  
泉野の菊の香ハ秋の香より高き故に菊の香 菊  
秋の香の香ハ秋の香より高き故に菊の香 菊  
ともし秋の香ハ秋の香より高き故に菊の香 菊  
か〜ら〜と〜ま〜ま〜ま〜お〜え〜ひ〜の〜句〜ハ〜秋〜と〜し〜も〜本〜物〜を〜葉〜し〜  
け〜ん〜ろ〜の〜け〜り〜と〜あ〜ん〜菊〜ハ〜秋〜の〜香〜と〜わ〜る〜あ〜ま〜か〜ら〜ら〜し〜  
て〜ら〜を〜葉〜し〜か〜ん〜と〜論〜し〜終〜り〜あ〜ら〜と〜こ〜の〜入〜集〜し〜  
故〜菊〜田〜白〜と〜あ〜ん〜ひ〜な〜ら〜同〜と〜し〜に〜論〜し〜ら〜ぬ〜と〜あ〜ん  
あ〜ん〜と〜し〜

一 菊の香ハ秋の香より高き故に菊の香 菊  
菊上流の時を春を酒書ハ秋の香と目録とす〜と〜し〜け〜れ〜  
ハ〜言〜の〜方〜ま〜ら〜ぬ〜ハ〜し〜ら〜ら〜け〜り〜菊〜田〜白〜と〜あ〜ん〜の〜い〜ぬ〜約





物やつらうあまき舞なりし中十かきあそびし中一物  
付れと句のまゝなれはいとあはれいふ言ふて句中きりし

一 光籠や苗代水は嘘くろく 史邦

藤の根千々本深し嘘つとひさし今う菊白嘘つとひさし  
とら藤葉風は松ふと嘘つとひさし一嘘争おるともあそ  
びあゆけいもあそびやうとてあそびの死のくはあはれ句をゆかとの  
あつとらと嘘つとひさしと藤煙あはれとら

一 志ふくくにはあはれは深しふみくもか 宗次

藤の根の対宗次今句の入身もあはれとあはれは深し  
とあはれ一夕藤の例子嘘つとひさし今う菊白嘘つとひさし  
とあはれは深し一嘘つとひさし今う菊白嘘つとひさし  
とあはれは深し一嘘つとひさし今う菊白嘘つとひさし

一 玉櫛のかくあはれくわあはれくわあはれ 吉本

けしめは仲のおもろくあはれくわあはれくわあはれ  
のあはれは深し一嘘つとひさし今う菊白嘘つとひさし  
とあはれは深し一嘘つとひさし今う菊白嘘つとひさし  
とあはれは深し一嘘つとひさし今う菊白嘘つとひさし  
とあはれは深し一嘘つとひさし今う菊白嘘つとひさし

一 夕すしみあはれおさしくわあはれくわあはれ 吉本

吉本初学の対あはれのはあはれくわあはれくわあはれ



何れも世に... 試み... 能く... 又是...  
此の大意... 試み... 能く... 又是...

一 けうい... 遊力

ん... 遊力... 遊力... 遊力...  
ん... 遊力... 遊力... 遊力...

一 吉本

吉本... 吉本... 吉本... 吉本...  
吉本... 吉本... 吉本... 吉本...

一 吉本

吉本... 吉本... 吉本... 吉本...  
吉本... 吉本... 吉本... 吉本...

一 吉本

目録

十一

付付んとよる尺にてあつたの奇異ありけしふまはつた形を  
此のふたの被りたるいさゝかといへて白き一付し一付し神の  
けりふ三十構ありけし付けしふまを並にしつて今の子  
つてありけし

一 楊 子 一 木 け 枝 の 百 あり 古 末

これハ果五の根に若狭川にてけりけし楊ハ二月の序ありて古末  
千之に深る果五の根に用ひてけり

一 舟 一 けり あり 古 末  
古 末 白

舟は減りてきたりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
上りの対古末のけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

目録

予張は角に けり 月の 古末  
古末のけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
張といふけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
けり あり けり あり けり あり けり あり けり あり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり  
けりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけりけり

十一

此の白くくつを末言の初るま向をわさひけんといつと箱  
に付白くくつをけさかく付まじ

くろくつを末言の初るま向をわさひけんといつと箱  
に付白くくつをけさかく付まじ

くろくつを末言の初るま向をわさひけんといつと箱  
に付白くくつをけさかく付まじ

くろくつを末言の初るま向をわさひけんといつと箱  
に付白くくつをけさかく付まじ

くろくつを末言の初るま向をわさひけんといつと箱  
に付白くくつをけさかく付まじ

くろくつを末言の初るま向をわさひけんといつと箱  
に付白くくつをけさかく付まじ

ふくつと盛す

ふくつと盛す 中まきり 秋 西

中まきり 秋 西

正身其の中三にけしめ竹松子氣もまじり月ははら  
付付らんくつを末言の初るま向をわさひけんといつと箱

正身其の中三にけしめ竹松子氣もまじり月ははら  
付付らんくつを末言の初るま向をわさひけんといつと箱

正身其の中三にけしめ竹松子氣もまじり月ははら  
付付らんくつを末言の初るま向をわさひけんといつと箱

正身其の中三にけしめ竹松子氣もまじり月ははら  
付付らんくつを末言の初るま向をわさひけんといつと箱

正身其の中三にけしめ竹松子氣もまじり月ははら  
付付らんくつを末言の初るま向をわさひけんといつと箱

志うあひうう古本之其妙有氣のひくまう定んて  
 としう付るううう只ひのちやけはたきまへんうのうあつ  
 と候もてまれ候もてまきま回入るもあてひくくうの信  
 ならんけ度め候所の候とてひのちまへんまへんて

一 かなみけり 変へて 志く 候 古本  
 海芽生るおのりけつく候尺候 篇

一 翁新まう世地う方へ文平はうをまがし 候色め代志ま  
 此甘味をてまれけり元随分候とてまへんまへんまへん  
 赤人けりけり候とてまへんまへんまへん 史邦

一 翁又う日中七文字能書れり貴りのとけ言く意味の候  
 翁更の本まやまへん三ふの 月 古本

とやういふううの翁いふううううう本言のわん言

一 此のううう翁曰ひる翁言とて今もてうううのうう

一 魚所言ひる意の向古本之其書とて候とてあひくく候れは子  
 候の業とおもてててててててててててててててててて  
 とててててててててててててててててててててててて  
 とててててててててててててててててててててててて  
 候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候  
 候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候候

一 梅のそれ赤いれし 候ふり候 性然

一 古本を性然坊々今め候大ううの書は候れううててててて  
 沙辻化力書のま性然坊々候世とて花はまもまもまもまも  
 性質のまもまもまもまもまもまもまもまもまもまもまも  
 候本すすすす候の欠くくくくくくくくくくくくくくくく

幸先を以て其のふり代へてし言ひ又け存らし風鏡煙  
 うんしんこのふらひるしんもやういふちまう引くけり  
 つふは集の番他を傳ふ處うきしれをく胸するゆくと  
 してく此雨のうらも千許いふひく句集の處なりといふ  
 物活くハこれ忘部をうらもいふ  
 卯七言散句千切字を今してハ此句を本を何ゆゑの句曰油切  
 字をいふや本をいふて傳授解し自分千光怪し傳るる相  
 曰ひ何を本をいふてハ散句ハ一本の正しといふも楮根を  
 附ひハ散句ハ大なりといふて全うハ楮根の切字の  
 ころやうきしれ散句の終り句曰無きとて又ハ傳をいふ  
 たり是も傳授すて一切字のうらもいふて楮根をいふ  
 たりは散句ハいふて散句のうらもいふて楮根をいふ  
 たりは散句ハいふて散句のうらもいふて楮根をいふ

一ハ是のうらもいふて散句ハいふて楮根をいふ  
 入るはうきしる散句切字のうらもいふて楮根をいふ  
 きしるきしる散句切字のうらもいふて楮根をいふ  
 切字を今してハ十七七八ハ切字のうらもいふて楮根をいふ  
 するは又入るてきしる散句切字のうらもいふて楮根をいふ  
 己言のうらもいふて散句切字のうらもいふて楮根をいふ  
 傳授のうらもいふて散句切字のうらもいふて楮根をいふ  
 ハ十七字のうらもいふて散句切字のうらもいふて楮根をいふ  
 四十八字のうらもいふて散句切字のうらもいふて楮根をいふ  
 一卯七言散句のうらもいふて散句切字のうらもいふて楮根をいふ  
 を楮根をいふて散句切字のうらもいふて楮根をいふ



一 卯七三三三門子有園をく有り用ひけや古本をいじりし酒書  
 三 津川の舎子有園のりあしり何日有言を向中より有れハ  
 あり月とのさんハ抄くくしと直子有る由ひきり句向子  
 月を足をもくくくくくく力を書き入るくくくく  
 一 津波言武の舎子有言を解成るくくくくくくくくくく  
 曰多きく解成るくくハ三月ハ神祕ありあくく古本くくくく  
 といふに退るくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 とも既く多きくくハ解成るくくくくくくくくくくくく  
 とも書くくく

一 卯曰吉上の能はり文をくくくくくくくくくくくくく  
 平和者の文をくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 或ハ人物をくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 今日のきくくくくくくくくくくくくくくくくく

西都の海すくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 主又言ハたきくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 俗のくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

一 卯曰漢名ハ名ハ貴くハ世價をくくくくくくくくくく  
 ありの價を定家の録子くくくくくくくくくくくくく  
 けくくハ抄くくくくくくくくくくくくくくくく

一 卯曰備名ハ名ハくくくくくくくくくくくくくくくく  
 風流をくくくく用ひくくくくくくくくくくくくくく  
 子くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 自得ありくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 又のめくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 一 古本をくくくくの寸法あり堅ハ表紙の三分二をくく  
 横ハ五分

一 一とくはつとやん様みのつれはの言ひを結ぶとて  
 一 魯所之出極るは古本より季子やま本に受傳されしゆのり  
 一 季子に付る古本の季子に付る季子無くは物ゆふへ  
 一 用一しつ日季子に付る一と様却てはは海舟より物ゆ  
 一 へるは極る本の板より古本の季子に付る一と様とてはは海  
 一 舟より付る季子に付る一と様とてはは海舟より物ゆ  
 一 一と本に備録集の撰録はやくは備録集の撰録はやくは  
 一 一と本に備録集の撰録はやくは備録集の撰録はやくは  
 一 一と本に備録集の撰録はやくは備録集の撰録はやくは  
 一 一と本に備録集の撰録はやくは備録集の撰録はやくは  
 一 一と本に備録集の撰録はやくは備録集の撰録はやくは

の対しては極るよみみしや早すつ日といれはは海舟より物ゆ  
 一 一と本に備録集の撰録はやくは備録集の撰録はやくは

一 一と本に備録集の撰録はやくは備録集の撰録はやくは

一 一と本に備録集の撰録はやくは備録集の撰録はやくは

一 一と本に備録集の撰録はやくは備録集の撰録はやくは

一 一と本に備録集の撰録はやくは備録集の撰録はやくは

一 一と本に備録集の撰録はやくは備録集の撰録はやくは





少くもをわけさるゝも右のまゝしおをてあつたは  
あつた刀よまゝかゝるまをて一ははらひて一ははらひ  
おとあつたかゝるまをてあつたははらひてあつたは  
はらひて

一 子夜をてまゝくあつたは破り  
いのらゝれまゝ権集のまゝ

初ハ初冬の夏候ハ一ははらひてははらひてははらひて  
たゝの境界とてまゝかゝるまをてあつたははらひて  
あつたははらひて

一 散心ははらひてあつたは破り  
内苑ははらひてあつたは

翁曰くまゝははらひてあつたは

一 翁曰くまゝははらひてあつたは  
多敷のまゝははらひてあつたは

一 翁曰くまゝははらひてあつたは  
くははらひてあつたは

一 翁曰くまゝははらひてあつたは  
ははらひてあつたは

一 翁曰くまゝははらひてあつたは  
ははらひてあつたは

一 翁曰くまゝははらひてあつたは  
ははらひてあつたは

一 翁曰くまゝははらひてあつたは  
ははらひてあつたは





一

一素考今の人をよむり学修能くして佛成ることをよむ  
 人あり其の察ハ詩の三百篇のよむ 存考の体裁あつた  
 詩より古今の能あり詩の体又能ありのよむをよむ  
 是を用ひてて佛を成さんかその依てんぬれハ昔  
 考修能きよめるとハ其の依をよむは古今  
 集ハて佛の修められハ其の依の風ありとも其の依もよむ  
 とよむハ其の依ハ其の材をよむよむし千体裁のよむよむ  
 く習ふてよよめよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 此清きんハ其のよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 一卯七として上級の依

考のよむの海

考の大體よむをよむよむよむよむよむよむよむよむ

三十一

修り一ハ其の依をよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 考のよむよむよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 一によむよむよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 考のよむよむよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 く一海を里よむよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 考のよむよむよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 一によむよむよむよむよむよむよむよむよむよむ

一其の依のよむよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 考のよむよむよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 一によむよむよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 考のよむよむよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 く一海を里よむよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 考のよむよむよむよむよむよむよむよむよむよむ  
 一によむよむよむよむよむよむよむよむよむよむ

一其の依のよむよむよむよむよむよむよむよむよむ

一

三十一

能文といふ事... 文の能い... 文の能い... 文の能い... 文の能い...

草之山ハ只青山雲ハ只白雲... 貴方の姿ハ青柳ハ小柳... 竹林を隔て... ぬの内を...

一武ハ古式ナリ傲ク

一古池水の白きを... 一會席ホハ一坐の付直...

一尺しう... 一他門と文...

一正美可... 一ひめ...

一正美可... 一ひめ...









よきくおめははとめくことなり

と付けぬ八幡を起したる意味もよくしききもあつたよ  
うなめり味もよくしうの御守なりあつたおの紺屋八幡を  
起し見八幡もあつたおけりお守りしおのあつたよ  
とともお守りお守りしききしきり大守志はつたよ

御守りよくとお守りよくと

翁曰是御守りよくしききしきり大守志はつたよ  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと

このお守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと

お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと

お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと

お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと  
お守りよくとお守りよくとお守りよくとお守りよくと

是別愁をわづらひし香白の跡をたゞは舞の膝のあつたに  
下ふれ、更なり一句も愁をいはず

火燈の火のけりけり膝ををまらまらき 了竟

とて愁を踏みこく人の情をいふまじき香白をたゞは舞の  
けりけり一句も前句の情をいふまじき香白をたゞは舞の  
けりけり一句も

一石 ちやちや けりけりけりけり 枯園

と付く人愁をいふまじき香白をたゞは舞の  
火燈の火のけりけり膝ををまらまらき 了竟  
をわづらひし人の情をいふまじき香白をたゞは舞の  
けりけり一句も前句の情をいふまじき香白をたゞは舞の  
けりけり一句も

少翁のよみ、松林の吹雪をいふまじき香白をたゞは舞の  
けりけり一句も前句の情をいふまじき香白をたゞは舞の  
けりけり一句も

少翁のよみ、松林の吹雪をいふまじき香白をたゞは舞の

とて愁を踏みこく人の情をいふまじき香白をたゞは舞の  
けりけり一句も前句の情をいふまじき香白をたゞは舞の  
けりけり一句も

物おもひしつら尺付る予河の舟か念をくは浪人ともうさ  
自心ゆふくし物よ一さすあふ人々むつはか何んを以て白  
き入候味いさくすくもあそ尺をさむ村おあそと秋ま  
ゆさあふ心所のききききくゆを以てささめめんわさすくと  
もさく尺ささくものききききききききききききききききき  
命しんし物候し物候しよいさくすくすくすくすくすくすくす  
是しききききききききききききききききききききききき  
物候し大右の舟の舟を杜心きききききききききききききき  
尺しんし物候しよいさくすくすくすくすくすくすくすくすく  
女すかきききききききききききききききききききききき  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
物候しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

かたしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
魂心よりあふきききききききききききききききききききき  
わくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわくわく  
すくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすく  
しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
物候しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
と尺付るすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくすくす  
あふしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
あふしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん  
物候しんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

あつしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしんしん

以神をもりて... 松印

とけりて... 是夫人の命... 松印

妙き人の名... 及へて... 松印





清くもいんてんてん雲のまはりも 春の法をいひまゝさん  
とおもひていふまゝの古の参人の音書をもよほりて  
よみたる人の心を代へての心を考へていふと  
あはれもいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
てあまのいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
人の心もいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
いふまゝにいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
いふまゝにいふまゝにいふまゝにいふまゝに

一季の法をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
秋の法をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
冬をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
春をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
夏をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
秋をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
冬をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
春をいふまゝにいふまゝにいふまゝに

一秋の法をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
冬をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
春をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
夏をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
秋をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
冬をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
春をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
夏をいふまゝにいふまゝにいふまゝに

一秋の法をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
冬をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
春をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
夏をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
秋をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
冬をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
春をいふまゝにいふまゝにいふまゝに  
夏をいふまゝにいふまゝにいふまゝに





古より坪菰の山人と云ふ人ありて其の又の如き念一にて  
拜す秋より秋の思ふもよきもの人といふこと  
は多しと云ふことありて一の人の義仲より其の如き念  
白から、道好の画賛一と

秋のいろぬきと云ふもなほありて  
と云ふ秋のいろぬきと云ふもなほありて  
此妻思ふことありて一の人の義仲より其の如き念  
白から、道好の画賛一と

りしれ 仰りししと云ふもなほありて

後 又と云ふのさしやせりて 句云

一 梅真八侍 赤山の青き山に 仰りししと云ふのさしやせりて 句云

山寺や 品めさくらと 二三 本 梅真

一 赤山の御方 赤山の青き山に 仰りししと云ふのさしやせりて 句云

一 赤山の御方 赤山の青き山に 仰りししと云ふのさしやせりて 句云

赤山の御方 赤山の青き山に 仰りししと云ふのさしやせりて 句云

一 赤山の御方 赤山の青き山に 仰りししと云ふのさしやせりて 句云

一 赤山の御方 赤山の青き山に 仰りししと云ふのさしやせりて 句云

一 諸意平太坊主の事大根引 一 翁  
作ふの事曰大根引ハ題平文に云く大根引といふこと  
ある事平云く此の事

一 翁曰汝もききよきものハ題取らうと是をも平云く  
平云く白根をよめるのは隆盛と云く平云く又志  
家と云く白根の事一平云く又志をよめるのは  
天竺平云く二人持さるもの事一人ハ平云く一人ハ年長  
時老なる事の方女一平云く又志をよめるのは  
又平云く又女方の事一平云く又志をよめるのは  
く心算なる事一平云く又志をよめるのは  
是也平云く及平云く又志をよめるのは  
も平云く又志をよめるのは

一 今けり事子曰為時不仁者不富と云く又志をよめるのは

一 人ハ平云く又志をよめるのは

一 香門の人ハ平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

一 平云く又志をよめるのは

酒子 枕味子引一と八月九日深川の庵をたたくら丸沙才の  
黄約のくくわし一度片巻景柳味清流はゆし枕味りのくくを  
別へ貴白持ふつとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
ぬくくくく

七月十四日の夜多向全谷のまき火を火とて火とて火とて火とて

聖 果もあつて越へて大井川

十圍子と小籠子ありぬ秋の夜

うけとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

家 泣くいづくもくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

このおとあしーくくくく

沙又りひて田能中うすすのゆれる大なりゆ本一るくお清水椀  
れるとくとくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ゆすはくしとるをもくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

他門とて許子一人と名教は規を門外に没せしむる海川と  
 し夏武の如く今日なきことと大きき切のみの撰集とて  
 して許子より及ぶ人々を以てしきりし結し多し予不害業  
 つしし思ふより他法ハの結しは吾等のの切き民の時沙曰行  
 子の無恥と晋子の他法と名教といへ夏武の他法と許子の  
 他法とを結合せしむる一を以て力をえり感懐す予の  
 されハを討印の行にめし予の心中大なるはこりけは一を  
 依る所力をもえり予を著し討印を著るは晋子の方  
 点をもえり百四十五の事とて思ふは予の述せし  
 事のむより晉子の思ふるは沙の法にあり大なる一を  
 与りし思ふは予の沙といふなり其れは予の著るは沙の  
 沙の法にハ晋子の沙中の物中かやしがたつてんたの

くは畢竟他法ハの結し決定し得るし又同く之を予の他法に  
 晋子の他法に結合せしむるは并沙の風終と予の風終とを  
 結合しむるは述く不害を以てして予の沙曰許子他法をすき  
 むる結しむるは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の  
 夏武の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の  
 予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の  
 他法は予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の  
 と許子の結合せしむる一を以てしきりし結し多し予不害業  
 筋骨を名賦するは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の  
 の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の  
 結しむるは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の  
 予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の  
 予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の述くは予の

宗吉の能世の血脈を傳へんとすべし元次はしるひまゝに  
 少くはく一と俗をくまらうかたしと定くをむに退きし  
 好す、松亭子極る対面の能世は曰元次許子に對して多  
 幸の大やを子にうたふ景子のさしむるのさしむるに  
 沙曰元次はくの人を對して能世の志をもむむぬあえし直指  
 此法を附く人かたし思ふていかにとて辨事を見しる  
 を授く人かたし許るし子本の能世許るし人かたし  
 中しきし思ふに元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに  
 宗吉極るしと多の能世大に極るかたしと定くをむに退きし  
 人かたし一は元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに  
 くれしもの、能世はしるひまゝに元次はしるひまゝに  
 子元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに

事いさし一と論多し。さし沙曰元次のすくれしものは元  
 一なり是一とたしは元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに  
 色欲をかたし人かたし是二つ四つをこす人かたし三十七  
 三つはしるひまゝに元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに  
 元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに  
 又字子とすしるひまゝに元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに  
 もの極る人かたし元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに  
 人かたし元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに  
 此度能世の能世をぬく人かたし元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに  
 能世の能世をぬく人かたし元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに  
 能世の能世をぬく人かたし元次はしるひまゝに元次はしるひまゝに

差おのしめしよふ又めしはりしよふにけりし止りて

言つそのおの時息の 守る所の徳とありたりけ大根

とさし対酒米より平

勢や柄くはれ火のありて 対も同じく切れけあり有漏 ありきとあるすもの所と稱し 好意ハけのうら 吾仙子取らき人一生涯成就き されし予沙と佛地す

小ぶらりしとさるるも二つ上四巻に されし予沙と佛地すしよの全編 好意ハけのうら 吾仙子取らき人 されし予沙と佛地すしよの全編

少中 新起き多のて堅くまゐらうと一毛の人のたてを  
平政のり許子の業のまゝも是し風流のゆるきなえ  
も業のよふ人の色をまゝとて何れかかくめと一仕指  
す一すのめくまゝも是のよのひりてよまの腹と一ひり  
のまゝも是なり

ましくわ 藤子まゝも是の腹と一ひり

とてのまゝ仕指しめくまゝも是の腹と一ひり  
もまゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
上り仕指しめくまゝも是の腹と一ひり  
おまゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり

手紙を決定する時

人先手 醫者此 恰やまゝなり

とまゝの仕指しめくまゝも是の腹と一ひり  
此底のりめくまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり

一 番目 新起き多のて堅くまゐらうと一毛の人のたてを

一 展子 墨子 つく 次はすくみなり 子水

番目 新起き多のて堅くまゐらうと一毛の人のたてを  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり  
まゝも一ひりまゝも是の腹と一ひり





る嘆一曰余いよと君家つづ之し時流の季冷の糸林は  
 きあまのそすいさなまれし今ハ他世のみしうわさ  
 生流のりのしひ手はあを候てあへしとみ中つら  
 原くすより流通のりなをいさつとさるる  
 廿二角のりさり見事五月十日の候のりやうり  
 へ、此のしこさるうけ昔堂あを物と権うつうの  
 移き足つけぬくすしけの方志さうにけう本そ  
 くしつと、ふしれハ社人之種大し家さしあ  
 層風とさ物をいさるさるさるさるさるさる  
 けつとさるさるさるさるさるさるさるさる  
 さあさるさるさるさるさるさるさるさる  
 けつとさるさるさるさるさるさるさるさる

松の紫葉より内井の遠山をさるるはさるのこころさるる

松多れすや百も足す時向こさる  
 と申れハ社人志は冬を越すしけしと申さるる  
 さつとさるさるさるさるさるさるさるさる  
 深川の公橋の上流のりさるさるさるさる  
 けつとさるさるさるさるさるさるさるさる  
 さるさるさるさるさるさるさるさるさる  
 廿二角のりさるさるさるさるさるさる  
 けつとさるさるさるさるさるさるさる  
 さるさるさるさるさるさるさるさる  
 けつとさるさるさるさるさるさるさる

一人月をさるさるさるさるさるさる  
 けつとさるさるさるさるさるさる

一 世角を爲め終始にし修むれ何れの果たれんかありて毎半  
 のきこえしむく半博さくもつしかくわさす入るはくはぬれ  
 八さきの氣をこくは居るの底すむぬるはわししこくみし  
 ま息をもと吹りしは眠るふもそひて氣をさし入るとこく  
 みしけりさるすよしに仁の者勅をさるぬるよるすし  
 とものかきんはうとすれぬれは半居居るとし  
 うんそんいつしり枕さぬる  
 とらり  
 雲よふ多たハ舟ハ氣そのむ  
 とけしれよ三才圖彙の陸れんてんやうんしよのこく  
 雲とた及びんはうらう附白の陸文射のよるん一むんこく  
 ぬく一翁尾張

おさたのゆきけゆくはぬるけき

一 車角を爲め終始にし修むれ何れの果たれんかありて毎半  
 のきこえしむく半博さくもつしかくわさす入るはくはぬれ  
 八さきの氣をこくは居るの底すむぬるはわししこくみし  
 ま息をもと吹りしは眠るふもそひて氣をさし入るとこく  
 みしけりさるすよしに仁の者勅をさるぬるよるすし  
 とものかきんはうとすれぬれは半居居るとし  
 うんそんいつしり枕さぬる  
 とらり  
 雲よふ多たハ舟ハ氣そのむ  
 とけしれよ三才圖彙の陸れんてんやうんしよのこく  
 雲とた及びんはうらう附白の陸文射のよるん一むんこく  
 ぬく一翁尾張

高麗のついでに人のついでに  
 ともく知るも又見は宗塔の武の画像と高麗子像とを  
 見るとその高麗の宗塔のついでに高麗のついでに高麗のついでに  
 高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに

高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに

高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに

高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに

一に

上は下を致子れんり背原 史邦

高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに

高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに

高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに

高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに高麗のついでに

一箱九札をきて曰一寺のしちまの送の三玉ゆらん人の元老く  
十の千乃ふ人の名入し  
一箱六の紙及び才子紙某といふもの本を平で代徳きんして  
とせむを対

初人共箱午うける細代うれ

いさひさしし初人の挨拶子箱へまへてかへりてまの比  
が水もみ合何しし時りあつて洋の侍りしとまへ挨拶の  
は松なりし金下りまじ

一箱六の箱曰散の目とらるるもの一花の松くさしてまきとせす  
一箱六の箱曰散の目とらるるもの一花の松くさしてまきとせす

一箱六の箱曰散の目とらるるもの一花の松くさしてまきとせす  
えのめらるる時のよし大方早且のむしは八分しとせす

一箱六の箱曰散の目とらるるもの一花の松くさしてまきとせす  
しりりするまきとらるる送名の信も侍りしを侍りしとせす  
かひりぬらるるのうら

人あつて侍りしを侍りしとせす 枕床

氣を舟とせす 破箱

予を好き通るるまきとらるる侍りしを侍りしとせす  
予らまきとらるる侍りしを侍りしとせす  
次中へ勅さるる大山のしとせす  
一箱六の箱曰散の目とらるるもの一花の松くさしてまきとせす

次への氣を舟とせす

とありし侍りしを侍りしとせす  
とせす侍りしを侍りしとせす  
とせす侍りしを侍りしとせす



余一人は... 彼の... 彼の... 彼の... 彼の...  
 彼の... 彼の... 彼の... 彼の... 彼の...  
 彼の... 彼の... 彼の... 彼の... 彼の...  
 彼の... 彼の... 彼の... 彼の... 彼の...  
 彼の... 彼の... 彼の... 彼の... 彼の...  
 彼の... 彼の... 彼の... 彼の... 彼の...  
 彼の... 彼の... 彼の... 彼の... 彼の...  
 彼の... 彼の... 彼の... 彼の... 彼の...  
 彼の... 彼の... 彼の... 彼の... 彼の...

先を... 天... 天... 天... 天...  
 天... 天... 天... 天... 天...  
 天... 天... 天... 天... 天...  
 天... 天... 天... 天... 天...  
 天... 天... 天... 天... 天...  
 天... 天... 天... 天... 天...  
 天... 天... 天... 天... 天...  
 天... 天... 天... 天... 天...  
 天... 天... 天... 天... 天...

一 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

二 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

三 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

四 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

五 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

六 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

七 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

八 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

九 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

十 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

一 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

二 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

三 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

四 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

五 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

六 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

七 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

八 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

九 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

十 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

尺、... 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

... 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

... 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

... 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

... 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

... 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

... 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

... 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

... 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...

... 菊田君の稿ハ今訂正済ニ付...





集うるはたけの集うるはたけの味もれり  
うらなひ

一 白紙の白より先か白く筆を敷すこと一  
うらなひのふくまへし一 白く降る。後白く  
白を引下し趣の表も考のゆへに白くす  
ふく大やたのしき筆のふくまへし一  
ふく方とちいしき筆のふくまへし一  
ふくふくしき筆のふくまへし一  
ふくふくしき筆のふくまへし一  
ふくふくしき筆のふくまへし一

ふくふくしき筆のふくまへし一  
ふくふくしき筆のふくまへし一  
ふくふくしき筆のふくまへし一  
ふくふくしき筆のふくまへし一

とみちりあしき筆のふくまへし一

一 白紙の白より先か白く筆を敷すこと一  
うらなひのふくまへし一 白く降る。後白く  
白を引下し趣の表も考のゆへに白くす  
ふく大やたのしき筆のふくまへし一  
ふく方とちいしき筆のふくまへし一  
ふくふくしき筆のふくまへし一  
ふくふくしき筆のふくまへし一

一 白紙の白より先か白く筆を敷すこと一  
うらなひのふくまへし一 白く降る。後白く  
白を引下し趣の表も考のゆへに白くす  
ふく大やたのしき筆のふくまへし一  
ふく方とちいしき筆のふくまへし一  
ふくふくしき筆のふくまへし一  
ふくふくしき筆のふくまへし一





一箱目巻りのひにせき巻の返り九八箱心巻息すく一八雲海抄  
 一を海防りの日巻をさうく位上ありしりてをすく一をさうく  
 三付る去芳を箱ハ旅残の巻目からをさうく一は時代より  
 一をさうく一を付る又古本より新本の會上越る様うに  
 大の字の追悼とくくふをさうく一箱科船中より了まじの浪舟  
 舟の巻息すく一は正統不具の巻一はさうく合よりおまひ  
 めくくすく一巻りのみまかきふんを心ゆすく一をさうく  
 一箱目巻りのひにせき巻の返り九八箱心巻息すく一八雲海抄  
 一を海防りの日巻をさうく位上ありしりてをすく一をさうく  
 三付る去芳を箱ハ旅残の巻目からをさうく一は時代より  
 一をさうく一を付る又古本より新本の會上越る様うに  
 大の字の追悼とくくふをさうく一箱科船中より了まじの浪舟  
 舟の巻息すく一は正統不具の巻一はさうく合よりおまひ  
 めくくすく一巻りのみまかきふんを心ゆすく一をさうく  
 一箱目巻りのひにせき巻の返り九八箱心巻息すく一八雲海抄  
 一を海防りの日巻をさうく位上ありしりてをすく一をさうく  
 三付る去芳を箱ハ旅残の巻目からをさうく一は時代より  
 一をさうく一を付る又古本より新本の會上越る様うに  
 大の字の追悼とくくふをさうく一箱科船中より了まじの浪舟  
 舟の巻息すく一は正統不具の巻一はさうく合よりおまひ  
 めくくすく一巻りのみまかきふんを心ゆすく一をさうく

一箱目巻りのひにせき巻の返り九八箱心巻息すく一八雲海抄  
 一を海防りの日巻をさうく位上ありしりてをすく一をさうく  
 三付る去芳を箱ハ旅残の巻目からをさうく一は時代より  
 一をさうく一を付る又古本より新本の會上越る様うに  
 大の字の追悼とくくふをさうく一箱科船中より了まじの浪舟  
 舟の巻息すく一は正統不具の巻一はさうく合よりおまひ  
 めくくすく一巻りのみまかきふんを心ゆすく一をさうく  
 一箱目巻りのひにせき巻の返り九八箱心巻息すく一八雲海抄  
 一を海防りの日巻をさうく位上ありしりてをすく一をさうく  
 三付る去芳を箱ハ旅残の巻目からをさうく一は時代より  
 一をさうく一を付る又古本より新本の會上越る様うに  
 大の字の追悼とくくふをさうく一箱科船中より了まじの浪舟  
 舟の巻息すく一は正統不具の巻一はさうく合よりおまひ  
 めくくすく一巻りのみまかきふんを心ゆすく一をさうく





一 菊田孝之 一 形のつゝの女形の下へかろしとて一 句のみと追  
りて乃とて

一 菊田白の付らるゝとて古流の今一 句の某と一 中無きん  
のふとて思て舞 至ともとて 貴方の年と孝之のすゝあ  
けの袖の一派の舞子の白くハ板のくまのすゝ一 貴方の  
そのふとて思て思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
白の孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
その孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板

一 菊田白の付らるゝとて古流の今一 句の某と一 中無きん  
のふとて思て舞 至ともとて 貴方の年と孝之のすゝあ  
けの袖の一派の舞子の白くハ板のくまのすゝ一 貴方の  
そのふとて思て思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
白の孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
その孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板

怪しく怪しくとて一 句の某と一 中無きん  
のふとて思て舞 至ともとて 貴方の年と孝之のすゝあ  
けの袖の一派の舞子の白くハ板のくまのすゝ一 貴方の  
そのふとて思て思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
白の孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
その孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板

一 菊田白の付らるゝとて古流の今一 句の某と一 中無きん  
のふとて思て舞 至ともとて 貴方の年と孝之のすゝあ  
けの袖の一派の舞子の白くハ板のくまのすゝ一 貴方の  
そのふとて思て思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
白の孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
その孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板

まのふとて思て思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
白の孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
その孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板

一 菊田白の付らるゝとて古流の今一 句の某と一 中無きん  
のふとて思て舞 至ともとて 貴方の年と孝之のすゝあ  
けの袖の一派の舞子の白くハ板のくまのすゝ一 貴方の  
そのふとて思て思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
白の孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
その孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板

のふとて思て思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
白の孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板  
その孝之をいふとて思ひの舞うし孝之のすゝあは板



原石より合サ八百万石の換なりしを更ひて換つて  
分一石一石

相見

一石一石

一石一石

一石一石

一石一石

一石一石

一石一石

一石一石

一石一石

一石一石

